

提

言

地方創生・地域づくりにおける 人材育成（学校教育）について

ちばぎん総合研究所調査部部長 こまつ たかゆき
小松 孝之



今、全国の自治体が、今後加速的に進む人口減少に歯止めをかけ、地域社会・経済を活性化し、地域の人とコミュニティを元気にすべく「地方創生」（まち・ひと・しごと創生）に取り組んでいる。その主役・原動力は「人」であり、老若男女や出身を問わず、「地域を愛し地域で活躍する人」を一人でも多く増やすことが重要である。あわせて、地域を外から応援し、あるいはリピーターとなって何度も訪れてくれる「地域のファン」づくりも欠かせない。

このように地域で活躍する人を増やすためには、地域に仕事をつくり、安定した雇用を創出しなければならない。そのためには、農商工など他産業への波及効果が大きい観光産業の振興が、「地域のファン」づくりの観点からも重要である。近年急増中のインバウンド（2015年は約2,000万人を記録）の誘致や東京2020オリンピック・パラリンピックを睨んだ取組、あるいは日本版DMOの形成・確立といった新たな動きも含め、全国各地で観光による地方創生・地域づくりが盛んになっている。こうした動きは千葉県においても同様であり、特に、幕張においてオリンピック3競技、パラリンピック4競技の開催が決定したことを契機に、盛り上がりの兆しを見せている。

千葉県の観光面での特徴は、温暖な気候のもと、里山・里海の自然と農林水産物に恵まれ、スポーツ・レクリエーションから温泉、歴史・文化、都市型観光に至るまで、多種多様な魅力的な地域資源が県内各地に所在

していることである。一方、東京ディズニーリゾートや幕張メッセ、成田山新勝寺、アウトレット等の著名なものを除き、これらが多くが全国的あるいは県内でもあまり知られていないのが実態である。しかし、無名で小さな地域資源でも、地域住民が「地域の宝」として認識して掘り起し、知恵と工夫と熱い思いをもって活用することで、キラリと光る魅力に変えることが可能である。そして、それら地域の宝を、交流を通して来訪者に提供し、満足してもらうとともにお金を落としてもらうことが持続可能な地域活性化につながる。その際のポイントは、単純な概要説明ではなく、「地域の自然や歴史・文化、風習との関わり」あるいは「誕生秘話」や「こだわり」などを関連させ、ストーリー立てで紹介・発信することである。さらに、複数の地域資源をつなげれば点が線や面となり広域での魅力づくりに拡大し、季節ごとの魅力、例えば四季折々の自然や食、祭事をつなげれば、通年での魅力づくりが可能となる。これらの魅力を地域住民が交流を通して直接伝えることで、他所では味わうことのできない「オンリーワン」の魅力となり、来訪者にとって何よりの「おもてなし」になる。

これら一連の取組を成功に導く鍵は、より多くの地域住民が「地域のことをよく知り、地域の魅力や宝を発掘し、自信をもって発信すること」であり、その取組過程で「地域に誇りと愛着をもつこと」である。地域住民の郷土愛や郷土意識の薄い地域、あるいは地域住民が知らない・誇りに思わない地域資源

は、来訪者にとっても魅力的には映らない。こうした地域のことを学び発信する場・機会は、生涯学習活動やNPO活動の一環として提供されることが多いが、学校教育を通して子どものうちから学ぶことも重要である。

一例を示すと、館山市では、戦国時代から江戸時代初期まで十代170年にわたり安房地方を支配した里見氏について、その軌跡をとりまとめた歴史副読本「さとみ物語」を作成し、これを活用した社会科の授業を市内の全小・中学校で実践している。小学校学習指導要領解説（社会編）を見ると、教科目標として「社会生活についての理解を図り、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を育て、国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う。」と掲げられており、我が国の国土と歴史とともに、身近な地域についての理解を深め、地域社会に対する誇りと愛情を育てることを狙いとしている。平成26年の10月19日に千葉県南総文化ホールで開催された「里見シンポジウム」（房総里見氏の170年の軌跡）の第三部「こども里見パネルディスカッション」において、授業を受けた小学生による学習成果や里見氏への思いに関する発表があった。確か、現代のニュースレポーターが、戦国時代の合戦中の里見氏を取材し、私たち観客に報告するといった内容だったと記憶しているが、よく勉強しているという印象をもったことと、とても面白かったことを覚えている。後日、授業を担当した小学校教諭の寄稿文で「里見氏という地域の歴史学習を通して、歴史に対する理解と愛情を育てることができた」との感想を目にしたが、確かにその萌芽を感じることはできた。子どもたちは、学ぶだけではなく、学んだことを発信するという貴重な体験もしており、取組効果はとても大きいものと推察する。

話しを観光振興に戻すが、最近、全国の観光地で、小・中学生が観光客に名所・旧

跡等の魅力を伝える「子どもガイド」の活動が盛んになりつつある。子どもたちの真摯なガイドは、おそらく観光客の心に響くのではないか。子どもたちは、このような経験を通して、「調べたことをまとめる力」や「コミュニケーション能力」が養われるとともに、「地域への誇りや郷土愛」がより一層醸成されると思う。同時に、教える側の大人たちも、より一層真剣に地域のことを勉強するようになるとともに、こうした取組を通して多世代交流が活発になる。また、インバウンドを相手にする場合は、語学力や国際性も養われる。このように、子どもと大人と観光客の三者にwin-win-winのプラス効果が期待できる取組と言える。大事なことは、子どもの感性や自主性を尊重し、仮にうまくいかなくても、地域の大人と観光客が温かい気持ちで、次につながるようフォローすることが大事だ。観光客が、子どもより正確な情報を持っていたら、例えば、そのことを質問する形でうまく教える。あるいは、地域の大人や先生が付き添い、観光客とコミュニケーションをとりながらフォローするなど、フォローの仕方はいろいろある。また、学校教育の一環としてだけではなく、地域のNPOなどが中心となってコーディネートしてもよい。

このような取組を通して、たくさんの子どもが地域に誇りと愛着を持ち、地域の大人も子どもたちと一緒に成長し合うことができたなら、きっとその地域は元気に輝きを増し、「地域を愛し地域で活躍する人」や「地域のファン」が増え、ひいては人口減少に歯止めがかかるかもしれない。まずは、こうした取組で、地域を活性化し、輝かせてはどうか。

（館山市教育委員会）

